

## 円山応挙の画業再考

—原在中との比較による—

村上 敬 日本学術振興会／関西大学

本発表は、円山応挙(1733-1795)の画業を、原在中(1750-1837)の画業と比較することにより、応挙個人に纏わる資料を基礎とする従来の応挙論を再考するものである。

応挙と在中は、兄弟弟子あるいは師弟の間柄にあったとされ、絵師としての両者の母体には密接な繋がりがあった。それは、応挙と在中が学んだとされる鶴沢派の石田幽汀(1721-1786)であり、幽汀の活動拠点と目される公家・近衛家である。なお、従来の研究では、応挙は幽汀との師弟関係を短期間で終え、やがて園城寺長吏・祐常(1723-1773)の庇護を受け、写生に専念したとされる。ただ一方で、祐常は、幼少時に近衛家熙(1667-1736)から画技を学んだとされ、さらに応挙は、近衛家に仕えた渡辺始興(1683-1755)の《真写鳥類図巻》を、祐常との交流期に模写している。つまり、応挙が幽汀からの師承をすぐ卒えたとしても、両者の距離は以後も近く、それゆえ応挙と同じく幽汀に師事したとされる在中の存在は、その後の応挙の画業を分析する上で重要な考察対象となる。

在中については先行研究が少なく、現存する作品は寛政期以降に集中している。その上で、在中が寛政期から晩年にかけて揮毫した障壁画から、在中は和漢の古画を学び、それらの図様を自身の絵画へ積極的に転用したことが知られている。一方で、天明期以前、すなわち在中30歳台の若描きは、むしろ南蘋画を想起させる。さらに、同時期の在中作品には、解剖学に根差した作例も数点挙げることができ、それらは鶴沢派の画伝書『画道秘録』との関係をうかがわせる。このように、在中の作風は、新渡の絵画や学問の摂取から、「典拠主義」ともいべき倣古へと変遷したといえる。そしてそれは、応挙の画風変遷と共通性を有している。

応挙も、30歳台にあたる明和—安永期には、《花鳥図》(明和期、大英博物館)など南蘋派からの影響が色濃い作品を描いた。くわえて、《牡丹菊花群禽図》(明和—安永期)には、家熙が琉球を介して入手した清代画人・孫億の《花鳥図》(近衛家旧蔵)を学んだ可能性を指摘できる。一方、天明—寛政期になると、障壁画の制作が大幅に増え、掛幅形式の作品においても、明和—安永期にみられた精細緻密な描写は少なくなる。このような応挙の晩年にかけての画風の変化を、明和期に確立された「写生画」からの延長線上に捉えるなら、画技の円熟あるいは衰退と解釈されよう。これに対し、本発表では、応挙の天明—寛政期の作品について、在中との比較をもとに、当世の復古主義が反映されたものと解釈し、応挙芸術の新局面として評価したい。

(むらかみ・けい)